「黒漆葡萄栗鼠螺鈿箔絵八角盆」修理報告

佐久本純[1]　室瀬智弥[2]　鷺野谷一平[3]　橋本珠美[4]　松本達弥[5]

はじめに

本作品は、一般財団法人沖縄美ら島財団所蔵の「黒漆葡萄栗鼠螺鈿箔絵八角盆」である。令和４年５月11日から令和５年３月31日まで３年次にわたり株式会社目白漆芸文化財研究所で修理を行った。修理にあたり担当職員を佐久本純とし、総括責任者及び修理責任者を室瀬智弥、管理技術者を鷺野谷一平、修理担当者を橋本珠美、技術監修を松本達弥が担った。

Ⅰ．名　　称

黒漆葡萄栗鼠螺鈿箔絵八角盆 一枚

Ⅱ．概　　要

木製漆塗りの八角盆(図 1)。総体を褐色の漆塗りとし、見込みに葡萄栗鼠文様、鍔の内側面(うちそくめん)には花唐草文を表す。螺鈿には夜光貝を用い、葡萄の葉や葉脈、栗鼠の毛並み等を箔絵で表現する。やや丸みを取った鍔の外側面(がいそくめん)の各辺には窓枠を設け、その枠内には網代編みを施す。底裏面は、縁周りに高台を廻し、高台内には荒い布目を見せた塗りを施し、布目は緩やかな波線状を描いている。

法量：高さ 3.3　径 32.5（ｃｍ）

年代：17 世紀

図 1　作品全景(修理前)

---

[1] 一般財団法人 沖縄美ら島財団 総合研究所 琉球文化財研究室 研究員

[2] **株式会社** 目白漆芸文化財研究所　代表取締役

[3] **株式会社** 目白漆芸文化財研究所　管理技術者

[4] **株式会社** 目白漆芸文化財研究所　修理技術者

[5] 東京藝術大学　大学院美術研究科文化財保存学専攻　保存修復工芸研究室　非常勤講師

Ⅲ．修理前状態

総体に経年による漆塗膜の劣化や亀裂、剥離が生じていた(図 2)。漆塗膜表面に汚れが付着していた(図 3)。いくつかの貝に浮きが見られた(図 4)。見込み部分には、火災の影響で貼りついた薄葉紙を除去した箇所に、紙繊維の残存と固着した汚れが、シミ状の跡になっていた(図 5、6)。所々で漆塗膜に皺が寄り膨れたような箇所が見られた(図７)。漆塗膜が欠失した箇所からは、白色の下地層が見られた。このことから下地は、胡粉下地の可能性が考えられた(図 8)。見込みと鍔の接合部分に亀裂が生じていた(図 9)。鍔の外側面の各辺に施された網代と木地との接合部にも大きな亀裂が見られた(図 10)。

図 2 漆塗膜の亀裂

図 3 漆塗膜の汚れ

図 4 貝の浮き

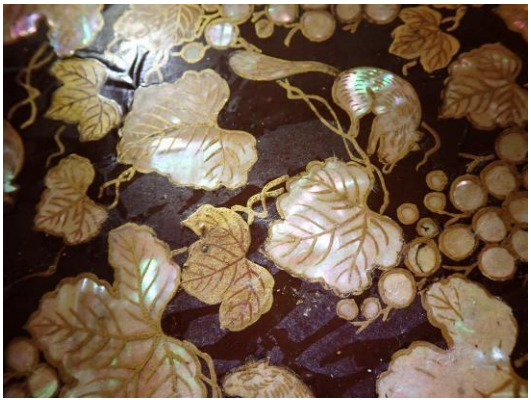


図 5 紙繊維の残存と固着汚れ

図 6 紙繊維の残存と固着汚れ

図 7 塗膜の浮き

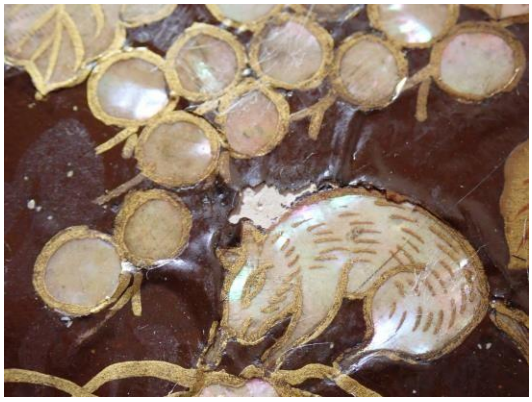


図 8　白色の下地層

図 9　見込みと鍔接合部の亀裂

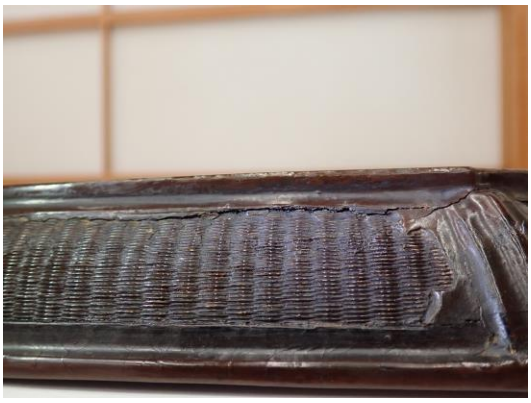


図 10　網代と木地接合部の亀裂

Ⅳ．修理方針

現在、我が国で行われている指定文化財漆工芸品の保存修理に則り、現状保存修理を原則として行う。環境の変化による作品への負担を軽減するため、搬入後および修理完了後は、環境の安定した収蔵庫内に保管し状態観察を行う。修理を始める際は、十分に事前の調査を行い、傷みの現状を確認した上で修理作業工程を決定する。修理中は、写真撮影を伴った作業記録を取り、修理箇所の比較ができるようにする。修理の完了時には、修理作業内容をまとめ、報告書を作成し提出する。なお、修理作業中に、当初の計画にない仕様の変更や追加の処置が必要となった場合は、速やかに所蔵者に報告を行い、該当箇所について関係各位と検討・協議を行う。検討・協議の結果、変更が必要と判断された場合は、変更の手続きを行う。

Ⅴ．修理作業報告

＜①修理前記録・撮影＞

修理作業へ取り掛かる前に、修理後との比較ができるよう作品の全景および部分の写真撮影をした。また、損傷状態を調査記録し、修理作業工程の確認を行った。その結果、当初の作業人工数の変更が必要と判断し、担当者と協議したうえで作業人工数を変更した。

＜②設置台製作等準備＞

作品を安定させて安全に作業を行うため、設置台の製作をした(図 11、12)。また、押さえに使用する心張り用の木枠や竹ひご等の準備も行った。

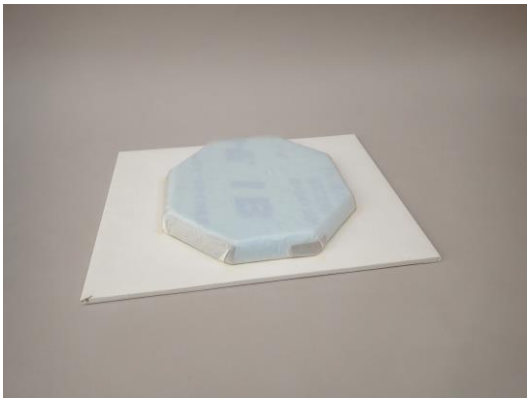


図 11　設置台

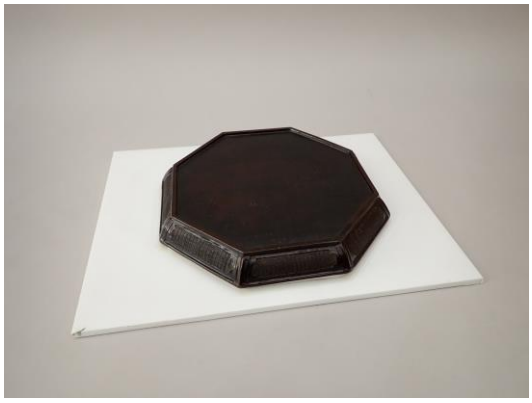


図 12　設置台(設置時)

＜③養生・クリーニング＞

クリーニングの前に剥落の恐れがある損傷箇所へ養生を行った。損傷箇所に、小さく短冊状に切った雁皮紙を糊で貼り、剥落防止の養生とした(図 13)。なお糊は、損傷箇所に影響を与えないよう、精製水で粘度を調整して使用した。

クリーニングは、作品表面に付着した埃などを毛棒で落とした後、僅かに精製水を含ませた柔らかな木綿布や綿棒を使用して、塗膜表面の汚れを数回に分けて少しずつ取り除いた(図 14)。なお、紙繊維の付着や固着汚れの箇所は、精製水では取り除くことができなかったため、別の除去方法を検討することとした。

図 13　養生

図 14　クリーニング

・火災の影響による損傷箇所への処置

見込みの塗膜部分で紙繊維の残存と固着汚れを確認した箇所は、精製水のみでは除去が難しかったため、重曹水を用いて処置を行った[1]。重曹水を僅かに含ませた柔らかい木綿布や綿棒を用いて、数回に分けて少しずつ紙繊維と汚れを除去した。その後、重曹水が塗膜表面に残留しないよう精製水を含ませた木綿布で丁寧に拭き取った(図 15)。重曹水を用いたクリーニングで紙繊維は概ね取り除くことができたが、固着汚れは完全には取りきることができなった(図 16) [2]。

取りきれなかった箇所は、微細粉末[3]と少量の精製水を含ませた木綿布や綿棒を用いて、汚れを絡め取るようにして除去した(図 17)。その際、塗膜の亀裂や貝の際に粉末が入らないよう留意した。除去後は、粉末が表面に残らないよう精製水を含ませた木綿布で丁寧に拭き取った(図 18)。

図 15　紙繊維の除去(塗膜部分)

図 16　取りきれなかった固着汚れ

図 17　微細粉末による除去後

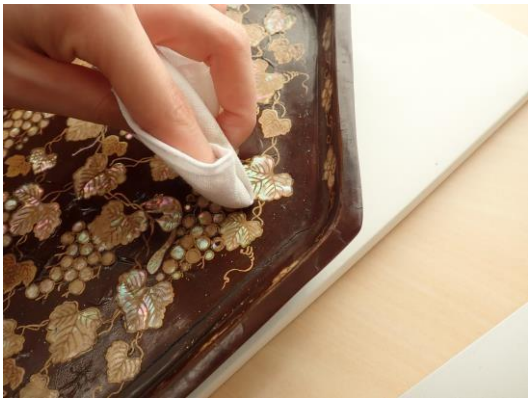


図 18　拭き取り

[1] 令和 4 年 6 月 15 日の会議にて琉球漆工藝舎の土井菜々子氏より、紙繊維・固着汚れには重曹水が有効との報告を受け関係各位で検討・協議を行い、使用を決定した。処置では、土井氏の報告を参考に 3～5w/v%濃度の重曹水を紙繊維・固着汚れの状態に応じて適宜使用した。

[2] 重曹水で緩みやや粘度を持った固着汚れを、塗膜表面で拭き伸ばしているような感触であった。

[3] 角粉や磨き粉(三和製)、石粉(白砥石、鳴滝砥石)を適宜使用した。

＜④貝押さえ＞

貝の浮きを確認した箇所は、押さえを行い安定させた。貝の押さえに漆を使用すると、貝の裏側に漆が染み込み、色合いが変わってしまう恐れがあったため、貝の安定と漆の染込み防止のため、膠を使用して含浸、押さえを行った。膠の含浸は貝の状態に応じて、接着力を適宜調整し数回に分けて行った後(図 19)、余分な膠が表面に残らないよう丁寧に拭き取り、心張り法[4]を用いて圧着して安定させた(図 20)。

図 19 膠含浸

図 20 心張り

＜⑤麦漆含浸＞

亀裂や接合部分の隙間、下地が露出している部分などの損傷箇所は、構造の安定と補強のため麦漆の含浸を行った。損傷箇所の状態に応じ、溶剤[5]で麦漆の[6]希釈濃度を適宜調整し、数回に分けて含浸を行った。十分に麦漆を含浸させた後、表面の余分な漆は拭き取り乾固させた(図 21、22)。

図 21 亀裂部分への麦漆含浸

図 22 接合部の隙間への麦漆含浸

[4] 木枠の中に作品を設置し、竹ひごの弾力を利用して貝や塗膜の剥離を押さえ圧着する方法。

[5] 鉱物性揮発油のペトロールを使用。本修理において溶剤と表記するものはペトロールを使用している。

[6] 精製水で水練りした小麦粉に、生正味漆を混ぜ合わせたもの。

＜⑥塗膜押さえ＞

塗膜の剥離箇所は、押さえを行い安定させた。押さえには、溶剤で希釈した麦漆を使用した。剥離箇所の状態に応じて、麦漆の希釈濃度を適宜調整し、筆等を用いて剥離塗膜の際より数回に分けて含浸を行った。その後、表面に残った余分な麦漆は丁寧に拭き取り、心張り法を用いて剥離箇所を圧着安定させた(図 23、24)。貝際の塗膜押さえは、貝の裏側に麦漆が染み込み変色するのを防ぐため、貝の裏に膠が十分に充填されたことを確認してから麦漆を含浸した。

なお、剥離した塗膜が硬く、無理に押さえを行うと損傷の恐れがある箇所や、塗膜が膨れるように浮き、際からの麦漆含浸が困難な箇所は、今回は処置を行わず現状のままとした。

図 23　心張り(見込み)

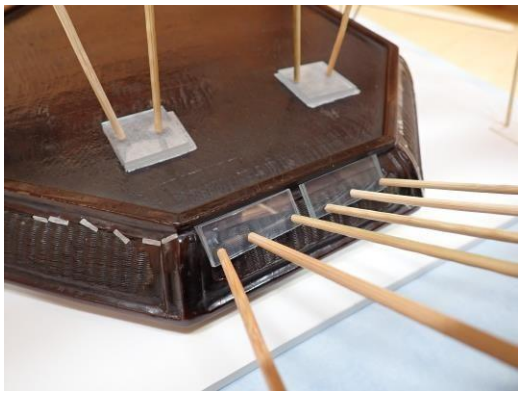


図 24　心張り(網代接合部)

＜⑦刻苧充填＞

木地と網代の接合部の隙間や亀裂、塗膜を欠失した箇所等は、刻苧[7]の充填を行った。刻苧の充填は、損傷の状態に応じ、混合する木粉の粒子を適宜変えて行った(図 25、26)。充填した刻苧が乾固した後、砥石等を用いて刻苧の形状を調整した。刻苧充填、乾固、形状調整の一連の作業を数回行い、刻苧が適切な高さまで充填できたことを確認した後、刻苧部分の漆固めを行った。

図 25　刻苧充填

図 26　刻苧部分の漆固め

[7] 麦漆に麻の繊維および木粉を混ぜ合わせたもの。

＜⑧下地付け＞

刻苧を充填した箇所や細かな損傷箇所には、漆下地[8]を施す下地付けを行った。下地付けは、損傷の度合いに応じて混合する地の粉の粒子を適宜変えて行った(図27)。下地が乾固した後、砥石等を用いて下地表面を整えた。下地付け、乾固、表面調整の一連の作業を数回行い、損傷箇所に下地が適切に施されたことを確認した後、下地表面の漆固めを行った。

図 27　下地付け

＜⑨錆付け＞

下地付けをした箇所や貝を押さえた際は、僅かながら段差が残るため、触手等により損傷を招く恐れがある。損傷防止のため、塗膜際に錆漆[9]を施す錆付けを行った(図 28)。

図 28　錆付け

＜⑩漆固め＞

漆固めは、高台の畳付と見込みを部分的に行った。畳付は、経年で漆塗膜が摩滅した箇所へスポンジ綿棒を用いて生正味漆を塗布し、余分な漆を拭き取り乾固させた。見込み全体は、比較的漆塗膜の状態が良好であったため、艶と色味に違和感がある箇所のみ漆固めを行った。見込みの漆固めは、溶剤で希釈した生正味漆を綿棒で当該箇所の境目に塗布し、色や艶が馴染むように拭き取り乾固させ仕上げた(図 29)。

図 29　漆固め(綿棒による塗布)

[8] 精製水を含ませた地の粉に生正味漆を混ぜ合わせたもの。
[9] 精製水を含ませた砥の粉に生正味漆を混ぜ合わせたもの。

＜⑪箱修理＞

損傷が見られた収納箱の修理を行う。

＜⑫修理記録撮影・報告書作成＞

修理作業完了後に写真撮影を行った。また、修理内容や記録写真をまとめ、報告書を作成した。

Ⅵ. 修理作業工程

①修理前記録・撮影

②設置台製作等準備

③養生・クリーニング

④貝押さえ

⑤麦漆含浸

⑥塗膜押さえ

⑦刻苧充填

⑧下地付け

⑨錆付け

⑩漆固め

⑪箱修理

⑫修理後記録撮影・報告書作成

Ⅶ. 修理期間

令和 4 年5 月11 日 ～ 令和 5 年3 月31 日

Ⅷ. 修理場所

株式会社 目白漆芸文化財研究所 修理室(東京都新宿区下落合 4－23－5)

No.０５３黒漆葡萄栗鼠螺鈿箔絵八角盆 修理前後比較写真

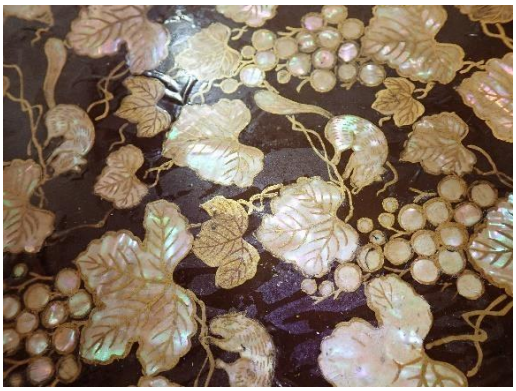
全景

修理前

修理後

修理前　　**修理後**

部分



紙繊維の残存と固着汚れ

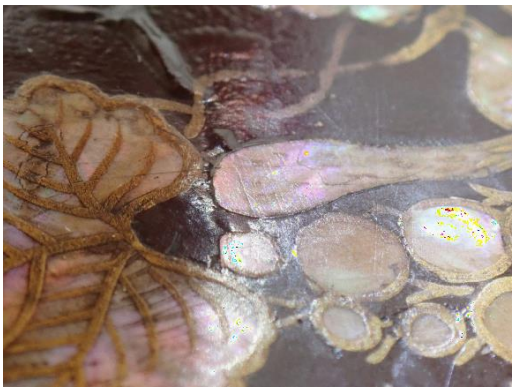
紙繊維の残存と固着汚れ

紙繊維の残存と固着汚れ

貝の浮き

修理前　　**修理後**

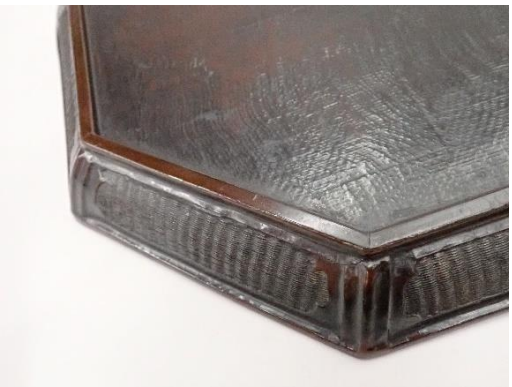
部分



貝の浮き

鍔部分との木地接合部の亀裂

鍔部分との木地接合の亀裂



畳付　紙繊維残存と固着汚れ